

沖縄語の学習における小書き文字の問題(3枚)

2007年5月14日

沖縄語研究家 船津好明

ここでいう小書き文字とは、文中の拗音、促音その他、主用文字より小さく書かれる文字をさします。活字の場合は容易に識別でき、また、広告、看板など見せるだけの文字としてはよいのですが、手で書くとなると、沖縄語は特に拗促音類が多いので、学習者には容易でなく、沖縄語の普及にも差し支えを感じます。これからの沖縄語の学習では、字は読むだけでなく、書くことも大切で、しかも易しく書けることが肝要です。手書きで間違いなく、印刷のときの校正がし易いことなど、沖縄語の普及を円滑に進めるためにも、小書き文字については一考を要します。

1、沖縄語の文献に見られる小書きの例

a. 拗促音で、共通語にもある音。

ちょーでー、ちょおでえ、ちゃっさ、ふいっちー。

b. 拗促音の類で沖縄語独特の音。

っわー、っやー、をうとうとうとうじ。

c. 助詞が直前の単語の語尾と融合するときの融合部分の音。

山あ、牛え、音お。

d. その他の場合。

うちなあ、ちょおでえ、いやー、いやー、いやー、うわー、うわー。

2、文の外見

沖縄語は拗促音類が多く、これらの全てを小書きすると、大小の文字が入り乱れて、どちらが主用文字が分からなくなる場合さえあります。例えば「ちょおでえ」と書くと、小文字が主で、一部に大文字が混ざっているように見えます。

3、何が問題か

(1) 問題は、学習者が手書きする場合に小書きが徹底せず、主用文字と同じ大きさになる傾向があることです。そうになると読むのに支障がでます。例えば「っわー」は小書きの「っ」が大きくなって「つわー」に、読みも「tsuwaa」となる傾向があります。その他の小書き文字も大きくなりがちで、書き手と読み手の間で意図の異なるものになってしまいます。このことは20年以上も前に研究調査で確かめられているし、最近の学習者にも同じ傾向がみられます。換言すれば、

この種の小書き方式は、活字を読むには問題はないのですが、筆記の場合に問題があるということです。読めても、正しく容易に書きにくい書法は、沖縄語の将来の発展のためによくないと思います。

(2) 校正は活字の正誤と配列を正す作業ですが、小書き文字が多くなると、文の正誤の判断がしにくくなり、誤植を起し易くなります。誤植は読者に大変迷惑です。

4、共通語ではなぜ問題にならないか

共通語でも拗促音を小書きするのに、なぜ問題にならないかということ、共通語では国語の読み書きの基本として、小書きを小学校で教えます。義務教育ですから、拗促音が読めない書けないでは済まされません。小学生は皆、共通語の話者であり、読み方書き方を教えられたとおりに習得し、習慣化します。一方、沖縄語の場合、学習者は必ずしも沖縄語の話者ではないこと、組織教育が整っていないこと、拗促音の数が共通語より遥かに多いこと、などの点で共通語を学習する場合とは全く事情が違います。

5、解決策

筆者は、小書きはある程度はやむをえないとしても、現在見られる書き方では、小書きが多すぎるため、その弊害を心配するものです。共通語の拗促音の小書きは教育方針ですから仕方ありませんが、沖縄語での小書きは、それと同じ音韻の拗促音に限ることとし、それ以外の沖縄語独特の拗促音の類は、新たに一字一音の仮名を開発して選択使用するのが、読むにも書くにも、沖縄語の将来の発展を考えると一番よいように思います。その場合、学習負担は初めだけです。小書き多用の書法は後々まで指導が必要です。

共通語と同じ音韻の拗促音とは、きゃ、きゅ、きょ、のように、か、さ、た、な、・・・の行、これに濁音、半濁音を加えての各拗音と促音「っ」をさします。共通語での小書きは小学校で教えられるので、沖縄語での小書きもこれに限ってはどうか、というのが筆者の意見です。

(参考1)

昔の日本語の表記の乱れ

昔の、特に戦前の日本語の書き方をみると、拗促音の小書きもなく、言文不一致は著しく、仮名遣いは乱れ、漢字は当て放題で、それでいて長年さしたる不都合も言われずに通ったのは、読み手が日本語の話者であったからです。

(参考2)

現在の国語教育での小書き仮名

文を構成する文字の大きさは、原則として同じ大きさとしませんが、現在の共通語では拗促音については、その部分を小書きすることになっています。小書き文字は、手書きの場

合に大きくなならないよう学校で教育します。「びょういん」(病院)と「びよういん」(美容院)は、「よ」の大きさを違えます。

(参考3)

昔の標準語の拗促音の書き方

旧仮名遣い時代には拗促音を小書きしない時期がありました。漢字の読みの中に拗促音が入っているときは、拗促音は漢字に隠れて字面(じづら)に現れません。また、漢字の振り仮名の中の拗促音は、新仮名遣いになってからも長い間小書きはされませんでした。

(参考4)

現在の共通語での小書きの状況

新仮名遣いになってから、主用文字に対して拗促音は小書きされるようになりましたが、活字漢字の振り仮名は、長い間全て同じ大きさで、拗促音の小書きはされませんでした。例えば「病院」も「美容院」も仮名を振る場合は「びよういん」でした。日本人は振り仮名に頼って読むことはなく、「病院」の振り仮名を「びよういん」としても、[bijooiN]とは読まず、[bjooiN]と読んでくれます。

ところが、ここ20 - 30年の間、国際化の進展で日本語を学ぶ外国人が増えてきて、彼等は振り仮名に頼って漢字を読み、「病院」は振り仮名の「びよういん」により[bijooiN]と読みます。それでは具合が悪いことに気付き、振り仮名においても拗促音を小書きし、「びよういん」とするようになりました。これが普及したのはさほど昔のことではなく1990年頃からのことです。

沖縄語に関する船津好明の最近の論文リスト

- ・沖縄語普及の一層の推進について(9枚)2007年3月5日
- ・沖縄語普及協議会の書法の試行結果について(4枚)2007年3月6日
- ・沖縄語の学習のための漢字の使い方の例(5枚)2007年3月28日
- ・沖縄語の中の漢字への振り仮名と送り仮名の例(2枚)2007年4月11日
- ・沖縄語の学習のための漢字について(第1次案)(3枚)2007年4月17日
- ・沖縄語の表記における長音の表し方について(3枚)2007年4月29日
- ・沖縄語の表記における旧仮名の活用について(5枚)2007年5月5日
- ・沖縄語の学習のための漢字について(第2次案)(5枚)2007年5月6日

照会先：〒1870002 東京都小平市花小金井2 - 6 - 1 船津好明

Tel/Fax 042-467-1273

Email funatsu@mvf.biglobe.ne.jp